

議事堂炎上

長谷川時雨

青空文庫

明治廿二年二月の憲法発布の日はその夜明けまで雪が降った。

上野の式場みゆきに行幸ある道筋は、掃清はきめられてあつたが、市中の泥でいねい
 濘いねいは、田の中のようだった。

上野ひろこうじ広小路黒門町のうなぎや大和田おおわだは、祖母に金のことで助けられていたので、その日も私たち子供に、最大公式ろぼの鹵簿ろぼを拝観させようと心配してくれた。

うなぎやの親方は、私の父に揚あげ板いたの下の鰻うなぎを見せて、あらいのをすく箆すくにあげて裂いた。父は表二階さかずきで盃さかずきを重ねはじめた。今朝けさから、というより昨日きのうから、芽出度めでたい芽出度めでたいといって、何かにつけてはお酒を飲んでいたので、あんぽんたんはそれをまた心配してい

た。

なぜなら、その目出たい日の午前あさ、文部大臣森有礼もりゆうれいが殺されたと、玄関から駈かけ込んできて知らせたものがあつたとき、わけも知らず胸がドキンとした。またすぐあとで、西野文太郎にし のぶんたろうがギザギザに切殺された——死骸しがいを入れた棺桶かんおけが通る——血がポタポタ垂れている——と、ほんとに嘘うそか、ワツという騒さわぎが来て、越中島の練兵場で、ズドンズドン並んで、鉄砲でやられているのと、盛んな蜚語ひごが飛んで、人々は上を下へと、悦よろこんだり青くなったり、そのなかを市中は、菰樽こもたるのかがみをぬいて、角々かどかどでの大盤振舞おおばんふるまいなのだから（前章参照）、幼心には何がなんだかわからず、大きな鰻をさかせたり、お酒をのんだりしている父と、

戸外そとにいることがたよりなかった。

思えば父たちのよろこびは、父祖ふそみな、町人と賤いやしめられてきた長い長い殻からを破りうる、議会政治をむかえるため、ここに新憲法の成立發布を、どんなにどんなにか祝したく思ったのであろう。江戸に生れて、志望を立てたのか、流行でなつたのか知らないが、剣を学んだ壮士が、幕府の倒壊をよそに見、朝ちようしん臣しんとなり、転じて自由党に参加して野人やじんとなり、代言人となつた彼は、自由民権といい、四民平等ということに、どんなにか血を湧わかしたのであろう。それは一人の江戸町人の悴せがればかりではない、国をあげて平民はよろこんだのだ。

——俺おれたちの時世がくる——

それが六十二議会で、議会は爛れただきつたものになって民心に嫌け厭んおをさえ感じさせるようになるなどとは思いかけず、彼は赤黒くなるほど飲んで祝したのだ。

私は十才とおにならない小耳にも、よく父が、

「俺は六十になったら代言人（弁護士となっていたかもしれない）をよす。若いものも、華はなやかに隠退させるといつている。」

と口ぐせのように言っていたのを覚えている。淡白で、頑固で、まけずぎらいで、鼻っぱりだけ強い、やや軽率と思われるほど、末期ど気の早いところのある、粘着性のうすい、申分ないほど、末期的江戸氣質タイプを充分にもった、ものわかりはよいが深い考えのない、

自嘲的皮肉に富んだ、気軽で、人情深くユーモアな彼は、なんとしても自分が法律なんぞという畑の人間でないことを、事ごとに思いあたっていたものであろう。だが、生れ土地で、地盤というものを、すこしでももっていたためか、選挙時にはゴタゴタしていた。

——日本橋区選出議員は改進黨の藤田茂吉氏ふじたもきちだったが、その後くすもとまさたか楠本正隆氏が、政友会から出る時、輸入候補だというので、地元への折合を担ぎこまれていた。いわゆる顔役——そんな時に、人を担いで顔をうっている区内の政治好きが、楠本氏に草鞋わらじを穿はかせ、袴はかまのももだちをとって連れてきた。握飯にぎりめしも持っているのだという。旅から来て、新選挙地に草鞋をぬぎ、土着どちやくになる

のを意味するのだときいたが、嘘の皮で、その前日にも打合せに
来ている。区内になんぞ住みもしなかったが、ともあれ、選挙ブ
ローカーが附いて、その姿で戸別訪問をはじめた。だが、おひと
よしの町人は——日本橋区は金で動かないからという策略があた
つて、握飯をもつて、草鞋で歩くとは、清廉せいれんな人だと当選させ
た。楠本氏はえらい人だというのに、こんな芝居しよさめいた所作をす
るのが、あんぽんたんには、代議政治を委任される代議士とい
うものが、妙なものとして印象された。

深川きばの木場が、震災の幾年か前まで、土地つ子で帽子をかぶつ
たものが歩いていかなかったように、日本橋区大門通辺では、明治

三十年ごろでも、帽子を被^{かぶ}つて歩いているものはすけなかつた。それは大よそゆきの旦^{だんな}那に限られた。旦那たちも紐^{ひも}までこつた前^{まえ}掛^{えだれ}をかけている。ましてお店^{みせ}の人は羽織を着たのもすけない。男の子は日清戦争後、めくらじまの上^{うわ}つぱりを着るようになって筒袖^{つつそで}になった。やつぱり盲目^{めくらじま}縞の（黒無地の木綿）前垂れをしめている。小僧さんが筒袖になったのはそれよりずっとあとだ。それもやや文化的商業、鉄物屋とか機械商とか、横浜と取引関係のある店からあらためはじめた。

だが、そんな小さな改良のかけにも、あらそわれない物の推移があつた。父は家業がら、近所の商家からの依頼をうけるので、店の推移について心を動かされもしたのであろう、よくこんなこ

とを言った。

「黒い、大きな判はんこが、朱肉になつてくると、商業あきないの具合がちがつてくるな。」

紫色のスタンプなどは、まだ見られないのだった。問屋筋のかたぎのうちでは、大きな、極ごく印いんのような判をベタベタと押した。実印も黒色くろだった。それが朱肉の、奇麗な印いん判になると、自然古い商業の、法則と反したものが流れてきて、古い取引が倒れたり、新しいやりかたが破産したりしたものと見える。

あたしの家の近所で、一番早くなくなったのが、両換屋りやうがえやと、煙管キセルのらお問屋だ。

大問屋町にすむと、土地の名によって、地方取引先の信用につ

なげるので、この大店おおたなの中にあつて、びつくりするような小
 舗がある。こういう人はきつと他所よそから、必ず成功しようと、搔か
 分きわけて潜り込んでくるのだから意気込みが違ちがう。笑われようと呆あき
 れられようと、そんな事にはむとんちやくで、活も気が資本もとだ。

隣り蔵と隣り蔵との間に、便宜上露路のある場処がある。片つ
 ぽの土蔵のほんの差さかけが、露路口にあつて、繩しなを収しまう納屋に
 もなつていと、その、たつたたたみ畳たたみもない場所を借りうけよう
 と猛烈な運動をする。昔から土一升、金一升の土地でも、額ねには
 ならない高いことをいって、断ことわつても借りてしままう。とにかく
 畳一畳へ造作をして、昼間は往来へはみださした台の上へ、うず
 高く店の商物しろものを積みあげる。この割込みが通れば一ぱしのもの

だ。いつの間にか、露路上へまで乗り出し、差かけ二階が出来上り、どこへあれだけの人数が寝るのだろうと思うほどの店員が住んで働らき出す——實際古くさい大店の、よどんだ中に、キビキビとそんなのが仕出すと、小気味がよいが、近隣の空気はどこことなく變つて、けいはくになつてくる——

そこで、あんぽんたんの家庭にも、少々變革があつた。それは弟が生れたからだ。

ひな雛の節句の日に、今夜、きょうだい同胞が一人ふえるから、蔵座敷に飾つてあるお雛さまを収しまえと言いつけられた。その宵、私たち小さくかたまつて、おとなしくしていると、八十二になつていた祖母が引ひき裾すそを、サヤサヤと音たてて、チンボだよチンボだよと言

いながら父の方へいった。

国会開設前であつた。父は一体遅い子持ちなのに、思いがけなく男の子が出来たので、興奮したのか、国会太郎としようかのと、変な名を言い出したりしたが、凡庸であつた時に困るであろうから、きわだつた名はつけぬものだど、祖母にいさめられていた。

生れた弟は弱い子で、真綿とフランネルと絹にくるまつていた。

男の子を生む——あととり家督取を生んだということが、旧式な家庭における主婦の位置を、どんなに高めたか——

親類というものからも、でい出入りというものからも、お手柄でございましてというさんじ讃詞と、張込んだ祝いものがくる。そこで、母の勢力が増して強くなつた。

議事堂が焼けた。議事堂炎上ということは、人の足を空にした。
私あたしうちの家でも、いくつ弓張りや手てまるち丸提燈ようちんに灯ひを入れて出して
やったかわからない。議事堂です、議事堂ですと、各自みんなが口々に
言った。丸の内の火事は、旧幕時代でも、町奉行、火消掛、お目め
附つけその他役附老中の出馬、諸大名の固め、町火消、諸家お抱火消かかえ
と繰出して、持場持場についたものだが、当今、城は宮城であり、
何しろ議事堂の失火だからと、父ははなしてくれた。単に建築物
が焼け滅びるといふ言葉意外に、大きな衝動をうけたに違いない。

そのころは、まだ写真術が幼稚だったし、新聞の号外もまだ早
く出なかつたから、私たちに目から教えたものは、やはり木版摺ずり

三枚つづきの錦にしきえ絵だった。ここに入れるのに丁度よい議事堂の火事の絵をもっていたのだが、どこへか失ってしまった。私は昨日も今日も、随分たんねんに探たずねたが見えないのですこしがつかりしている。

人は何かあると、家の中になんぞいられるものではないと見える。童女のおんぼんたんの知る憲法発布もそうだったが、日清戦争のはじまった時もそうだった。ただ、ワアーと男たちが外へ飛出した。ただすたすたと駈けてゆく。下駄で、前まえだ垂れがけの、縞しま物の着つけの人ばかりの町だ。かわった風ふうてい体のものが交まじり合あって目にもはいりはしない。なんだか妙に、賑にぎやかにさびしく、

興奮した顔というのか、近火へでも駈けつけるように、誰も話しあいもしないで、すたすたと、各自バラバラに駈けていった。女たちは落附かない、びっくりしたような、ポカンとした顔を門かどぐち口に並べていた。

戦争だ！

と誰かが叫んだ。みんなが駈けてゆくさきは交番だった。何か張紙がしてあつて、巡查さんが熱そうな顔をしていた。交番の前は、遠くから黒山の人ばかりでもみあつていた。そろそろ帰つてゆくものもあつて、その人たちは、青くひきしまった顔付きで家へと急いだ。今思えば、宣戦布告と召集の張紙であつたのであろう。もう涙ぐんでいる娘さんや、前垂れを眼にあてている女ひともあつた。

何しろ下駄の音は絶間なく走った。

ここで一言いわせてもらえば、ここまで書いてきた日本橋で、私あかしという子供が、すこしでも小利口に見えるようならば、書きかたが大変わるく、なっていないのだ。一月ほど前に北京ペーピンから帰ったあんぽんたんの妹おまつちゃん（前出）が、成城女学部にいる姪めいをつれてきて、何かクスクスにこついていたが、曰いわく、

「あなたって子は、ずいぶん呑気のんきな、阿呆あほつたらしい子でしたがねえ、ええ、かなり大きくなつたつて、何だかぼんやりしてたわ

。—
正まにその通り、総領まの甚六と、利発な妹とであつたのだ。

その甚六が俳句をつくる真似まねをする——私は和歌のつもりだつ

たのだが——当時父が俳書をひねっていたので、母は一概にそうきめてしまつて、父の方へ抗議がいつた。

「あなたが、そんなくだらないものを読んで、考え込んでお出なさるから、子供のくせに真似をして黙りこんでいて、溜息ためいきなんかつくから、陰気くさくつて困るじゃござんせんか。」

父はおかしな人だった。恐縮して俳句をやめ、私を叱しからないで、あんの山からこんの山へ、飛んでくるのはなんじやろか、と頭に二本、指だか扇子だかを、兎の耳のようにおつたてる小舞こまいを、能の狂言師をまねいて踊りだしたが、そんな小謡こうたいは父が汗を出して習うより早く、障子しょうじにうつる影を見て、子供たちの方がおぼえてしまった。

あんの山よりこんの山へとか、頭に二つ、フツフツとか、誰もかれもが唄い、踊りだすので、父が照れて止めて、こんどは茶の湯、家中が、そろりそろりと畳をすつてあるく——だが私の溜息をついたのは、別段、父の真似をして黙想したのではなく、胸に病をもちはじめたのを誰もが思いもつかなかつたのだ。堅い棒で肩を叩いたり、肋骨をもんだりするのを、ただ読物のせいにはばかりした。机によりかかっているからだど厳しくとめられた。ところで、悲惨なことに——あんぽんたんにとつても悲惨なことに、源泉学校は（前出）やつと尋常代用小学校となつたのに、校長秋山先生が疫病で急に死んで学校がなくなつた。温習科二年にたつた一人の生徒あたしは、それをしおに学問はやめ、裁

縫しことの稽古けいこにやられる運命になった。

ここに、日本橋住人の一家族として紹介しなければならぬ人たちはまだ沢山ある。思えば私はおかしな人たちの中にばかり育つてきたものだ。今日の尺ものさし度では、ちよいと量はかりきれない間ま伸びのしたものだ。甚だのんきなもののようだが、首都日本橋に面影をとどめた、三百年封建制度の膝下しつかにあつた市民の末期と、新しく萌もえあが上る力との、間に生きたある層の、ありのままの風俗である。

あたしはまた、ふたたび日本橋を書きつづける日を持つとうと思つている。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

議事堂炎上

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>